

パネルディスカッション

「平和ってなあに？～コスタリカから学べることは～」

出演者：伊藤千尋さん、岡野奏子さん、二階堂まり実行委員長



二階堂（司会兼）：

私がコスタリカに興味を持ったキッカケは2001年の同時多発テロの直後にアメリカが対テロ戦争と称して一緒に戦う「有志連合」を作ったのですが、それに対するコスタリカの対応でした。日本はもちろん諸手を挙げて賛成しました。コスタリカ政府も加わったんですが、そのときコスタリカの大学生のロベルトくんが「憲法違反だ、すぐに撤退を」と憲法法廷に訴え、裁判所は直ぐに判決を下して、政府に対して「賛成を取り消すように、そしてアメリカに対し有志連合のリストからコスタリカを削るように申し出なさい」と命じました。そのことを新聞で読んで、日本と同じ平和憲法を持っているけど、コスタリカって一体どんな国なんだろうと関心を持ち、2008年に取材に行きました。モンヘ元大統領（積極的永世非武装中立宣言）を出した大統領のお宅に伺ったり、あとは人権裁判所や国連平和大学、それに小学校から大学まで訪ね、先生や生徒から色々なことを聞いて来ました。とてもたくさんのかことを学び考えさせられたので、コスタリカのことを平和フェスタで取り上げたいなと思いました。

まず伊藤千尋さんに 20 分ほど基本的なところからお話をしていただき、そのあと岡野さんも交えて意見や思いを述べたいと思います。

伊藤：

私からコスタリカという国について、平和とは何なのかについてお話させていただきます。

平和ってなんですか？戦争が無いことって言われるじゃないですか。でも、第二次大戦が終わった後、世界で平和学という学問ができたんですね。ノルウェーのヨハン・ガルトゥング博士が始めたものです。彼はこう言っている。「平和って作らないとできないものだ。放っておけば世の中は争いの状態になる」。思えば色々火種があるじゃないですか。人種の不平等、男女の不平等、賃金の格差、こういったものを放置しておいたらもめごとが起きてやがて戦争につながっていく。だっ

たら、こういうもめごとを一つ一つ無くしていつて、誰もが安心して暮らせる、誰もが安全に暮らせる、そういう社会を作る、これを積極的平和（positive peace）と名付けました。積極的平和と言うとどこかで聞いてことがありますね。安倍首相が言ってますが、彼が英語で言う時は **proactive contribution to peace**。これは平和に対する積極的貢献という意味ですが、**proactive** という言葉は実は軍事用語です。先制攻撃を表す時に使う言葉です。やられる前にやれ！という意味です。ど



こかの国がミサイルを飛ばしてくるというなら、ミサイルが飛んでくる前にこっちから相手を攻撃して全滅させてしまおうと。これって、積極的平和主義ではなく積極的攻撃主義。本当の積極的平和主義というのは誰もの意見を認める、誰もの存在を認める、そしてみんなで共同して生きて行こう、これが本当の積極的平和の概念。

コスタリカでは中学2年の市民教育、日本で言う公民です。これを教えています。平和学の概念を教えている。「国家を統治している多くの人々は、ある一つの似通った、嫌な考えを持っています。権力を失うことを恐れています。」こんなことが教科書に載っている国、おもしろい国と思いませんか。ウチの国なら多分、削られますよ。

1949年に制定された憲法に「(第12条) 常設の組織としての軍隊は禁止する」というのを盛り込みました。日本に次いで世界で二番目の平和憲法国家になった。でも、日本と違って本当に軍隊をなくしました。この国に行くと戦車一台、軍艦一隻、戦闘機一機ありません。本当に軍隊をなくした。なぜ軍隊をなくしたのでしょうか。大きな理由が二つあります。一つは大きな戦争をしたことの反省。多くの人が死にました。なぜ戦争をしてしまったのか、本気で考えた。当時武器があって、軍隊があった。武器があるともめごとが起きたときに誰かが武器を持ち出す。そうすると相手方も持ち出します。結局、武力で解決しようとする。そうすると犠牲者が出る。こんなことはもうやめようじゃないか、という大きな世論が起きた。もう一つは、現実的なお話です。金です。この国は貧しい開発途上国です。1年間の予算もそんなにない。ところが、

軍隊を持っていた時、予算の30%が軍事費だった。軍事費ってお金がかかる。予算の30%も割いて、社会の発展にどれだけつながったろうか、ということを考えてみたら全くつながっていない、国は貧しいんだからお金の使い道を考えよう、本当に社会の発展につながることに金を使おうと考えました。では何に使うか、国会で話し合った結論が教育です。教育こそ社会の発展の基になる、自分の頭で考え、

なぜ軍隊をなくしたのか

- 内戦への反省
(1948年、4000人死亡)
- 軍事費にカネがかかりすぎる
(年間予算の30%を占めていた)



→何にカネを使えば
社会は発展するのか？

教育だ！

軍事費をなくして、
そっくり教育費にした
＜軍隊廃止時のスローガン＞
「兵士の数だけ教師をつくらう」



幼稚園から高校まで教育費無料
大学生の70%が無料の奨学金

自分の頭で行動する、こういう国民、こういう子どもを育むことが本当の社会の発展につながる、これが国会の結論でした。そこで軍事費を全くなくしてそのままこれを教育費に換えるということだった。その時のスローガンが「兵士の数だけ教師をつくろう」。立派なスローガンじゃないですか。さらに兵舎を博物館にしよう、トラクターは戦車より役に立つ、こういうスローガンを立てて、本当にやった。その結果何ができたのでしょうか。この国は幼稚園から高校まで無料。さらに大学はどうでしょうか。1年間の大学の授業料3万円です。日本と物価が違うといわれるでしょうが、そんなに変わらない。しかも、大学生の70%が奨学金を得ている。奨学金は日本では卒業しても返せないと問題になっています。コスタリカでは奨学金は奨学金だときっぱりした答えが返ってきます。つまり、返さなくていいんです。まるっきりもらう。大学生の70%が全く授業料を払わなくてやっていけている、しかも貧しい家庭の大学生は奨学金の他に生活費をもらう。こういう制度を作っている。それはなぜできたのでしょうか。貧しい開発途上国に。軍事費を失くしたからです。その一点に掛っている。それを達成したのがコスタリカ。

ただ軍隊を失くしただけではない。世界に平和を広めていく、平和の輸出と言っていますが、ここが日本と大分違う。例えば、国連平和大学を1980年につくりました。当時の大統領が国連総会に行って、世界が平和になるにはどうしたら良いか、その1点だけを考える専門の大学院大学をつくろうではないか、建物も用地もコスタリカが提供します、とって本当にできています。今、この大学、日本人の学生も毎年20人ぐらい行っています。日本人が教授となってここで教えています。

さらにすごかったのはこの人ですね。1986年の大統領選挙で当選して大統領になったオルカル・アリアス。当選すると直ぐに周りで戦争していた3つの国を回って、3つとも戦争を終わらせてしまった。なんでそんなことをしたのかと尋ねた。彼は「うちの国は平和憲法を持っている。平和憲法を持っている国は自分の国だけ平和で満足しているのではない。周りを平和にする、世界を平和にする、それが平和憲法国家の役割だ」というのですよ。うちの国の首相に聞かせてやりたい。こういう人が世界に平和を広める。それをやってきた。



オルカル・アリアス
大統領
(1986~90)
(2006~10)
「平和の輸出」

1987年
ノーベル平和賞
受賞

昨年の7月核兵器禁止条約が採択されました。その議長国がコスタリカだと言う話が先ほど（朗読劇）ありました。ホワイトさんが議長です。なぜコスタリカが議長になったのでしょうか。それはこの条約を提案したのがコスタリカだったからです。去年、突然提案したんじゃない。20年前の1997年に最初に提案、2回目が2007年、3回目が2017年。この20年間10年おきに3回、国連で核兵器禁止条約を提案した。その間、世界中に賛同して欲しいと働きかけをしてきた。その結果が去年の採択につながったのです。このようにコスタリカは自分のところだけ平和で満足しているのではない。世界に平和を広めると

国連核兵器禁止条約
2017年7月、賛成122で採択、
日本は不参加



提案国コスタリカ
議長国コスタリカ



いう努力をしている。画面の左上、JAPAN とある国連総会の日本政府の席ですが、ここには誰もいませんでした。日本政府はこの会議をボイコットした。そこに置いてあったのが先の歌にあった折り鶴なんです。

そして、このロベルト君、彼は2003年に大統領をたった一人で憲法違反を訴えた。2003年にアメリカのブッシュ大統領がイラク戦争を始めました。その時に日本の小泉首相はすぐに「賛成」と言いましたが、コスタリカのアベルという大統領も賛成とってしまった。それに対して、ロベルト君、コスタリカ大学法学部3年でしたが、おかしいじゃないかとたった一人で大統領を憲法違反で訴えた。その判決が1年半後、2004年9月にありました。彼の全面勝利です。実は2週間前に彼に会っている。なんでそうしたのか、大統領を憲法違反で訴えるってどういう気持ちだったのかとあらためて聞いてみた。

「僕を見てくれ。今も昔も体重が55キロしか無い。こんなひょろひょろの僕がたった一人で大統領を訴えるなんて大それたことだと思った。でも、その時に思ったのは、憲法が危機に陥った時に国民には闘う責任がある。」というのです。いまの日本の私たちにズシリと来る言葉ではないですか。実は彼に狛江で平和フェスタがあると云ったら、メッセージをくれた。(読み上げる)

「コスタリカの奇跡」という映画が狛江でも9月22日に上映されますが、ぜひこの映画を見て欲しい、ロベルト君も出ています。このメッセージ、ずシリと来ます。平和は創らなくてはできない、誰が創るのか、私たちです。

コスタリカが凄いのは平和憲法だけを活用しているのではないこと。憲法の全てを活用している。憲法違反の訴訟が1年間に2万件以上あります。ほんまかいな！と思うじゃないですか。そう思ったなら聞いて見ると言うのがやり方、最高裁判所に行きました。ロドリゲスさんに聞いた。

「本当に2万件もあるんですか」

「もっとありますよ」

「どんなのがあるんですか」

おじいさんが薬屋さんに行ったらその薬が無かった、というので、おじいさんが薬屋さんを相手取って憲法違反で訴えた。薬が無いくらいで憲法違反になるんですか？現になってますよ。判決文を見せてもらいました。こう書いてある。このおじいさんにとってその薬が無かったら健康な生活が維持できない。したがって明白な憲法違反である。うちの国の憲法25条で全ての国民は健康で文化的な生活を保障されている。同じような文面がコスタリカにもある。このおじいさんにとって薬が



大統領を憲法違反で訴えて勝った

ロベルト・サモラ君
(2004年9月)

「憲法が危機に陥ったとき、国民には闘う責任がある」

ロベルト・サモラ氏のメッセージ

"The case of Costa Rica is no miracle at all. From the documentary one can see that this Peace is the result of years of brave decisions and being true and honest with the principles enshrined in the concept of Peace. Peace is a road every people can walk, but the path has to be built."
Luis Roberto Zamora Bolaños

「コスタリカの件は決して奇跡などではありません。コスタリカの平和は長年にわたる勇気ある決定、そして平和の概念に基づいた考えを心から誠実に果たした結果であることが、映画「コスタリカの奇跡」からくみ取れます。平和はだれもが歩むことができる道ですが、その道は黙っていてできるものではなく創造されなければできないものです」

ルイス・ロベルト・サモラ・ボラニョス



最高裁判所

「基本的人権は常に守られなければならない」(最高裁のロドリゲスさん)

無ければ健康な生活が維持できない、ではどうすれば良いのか、判決に書いてある。この薬屋さんはおじいさんがいつ行っても良いように24時間365日この薬をおいておきなさいという判決です。これだけなら分からない訳でもないが、その次を見て仰天しました。このおじいさんはコスタリカ中を旅行するかもしれない。全ての薬屋さんはおじいさんがいつどこに行っても良いようにこの薬をおいておくよう厚生省は薬事行政をしなさい。ここまで面倒をみるのかと思いました。一旦憲法に書かれたことはこの社会に実現されていなければならないという考え方です。すごいつて思うことですが、思えば当たり前。日本では憲法に書いてあることは絵に描いた餅、実現していなくてもしょうが無いと諦めていませんか。違うんですよ！一旦憲法に書かれたことは社会がそれに合わせる、それがコスタリカの発想なんです。これをやっているのがコスタリカ。

この国、憲法違反の裁判を起こすのは大人だけではない、子どもも起こすんです。最小の年齢は8歳です。ほんまかいなと思うでしょ？聞いて見ました。本当です。何人も起こしています、との答え。例えば、小学校の隣の空き地に産業廃棄物業者がゴミを捨てて来ている。その臭いが風に乗って教室に漂ってきて、くさくて勉強に集中できない、と思った小学生が業者を相手取って憲法違反の訴訟を起こした。どうなったのでしょうか。ゴミを捨てたことが悪いのではありません。それによって子どもたちの学ぶ権利が侵されたのがいかんのです。他にありますか？校長先生が校庭に車を停めたために遊ぶスペースが狭くなったので訴訟になりました。車を停めたぐらいで訴訟になるんですか？なっていますよ。車を停めたことが悪いのではありません、それによって子どもたちの遊ぶ権利が侵されたのがいかんのです。

些細なことと思われるでしょうが、些細なことでも憲法違反ならば許さないのです。国民一人ひとりの生活が憲法と違うことがあれば、それを憲法違反の訴訟ということで正していく、これがコスタリカの発想です。つまり市民一人ひとりが、社会を憲法に合わせるようにしていつている、これこそ市民社会ではないかと私は思う。

このコスタリカが凄いのは難民100万人を受け入れていること。いま世界中が難民を排除している。ヨーロッパの国では難民が入ってくるから失業者が増えると言い、アメリカのトランプ政権はメキシコ人が入ってくるからアメリカをおかしくしていると国境に壁を造ろうなんて言っている。日本は一人難民を入れるのにぎゃあぎゃあ言っているという時に、このコスタリカは100万人を入れている。今から10年前、コスタ

リカの人口はわずか400万人。10年後の今500万人。100万人という違いがどうしてできたか、(ニカラグアの)難民を受け入れたからです。人口の1/4にもあたる難民を受け入れました。3年間住んでいたら国籍を与える。そのために人口が500万人になった。難民を入れると色々な問題が起きます。例えば、みんな良い人とは限らない、犯罪者もいます。失業者もいますというか、難民はみんな失業者です。そうした人の中でコスタリカに入ってきてても職のない人がいる。そうした人が犯罪に走る、治安は悪くなっています。それでも受け入れるのです。それは誰も排除しないということを国是に、コスタリカの哲学にしているからです。世界の中で輝か

だれも排除しない

ニカラグアの難民
100万人を
受け入れた



しいことだと思います。

いま世界は自分と違うことは排除しようという動きがある。それに反して、みんなと一緒に生きていこう、それを国内でも実践している、世界にも広げていく、これこそあるべき平和国家の姿だと思います。いま日本がどういう国を目指すのか、そこら辺が分からなくなっている。いま政治がおかしいおかしいという声が聞こえるけれど、ではどういう国にしていけば良いのか、私たちの社会をどのような社会にすればよいのか、コスタリカに一つの見本がある。もちろん、日本を全てコスタリカと同様にするのは無理ですが、このように貧しい国でも頑張っている国がある、だったらこの国をもっと理想に近付ける努力ができるのではないかと、僕はこの国を見て、そう思います。

パネルディスカッション

「平和ってなあに？～コスタリカから学べることは～」

出演者：伊藤千尋さん、岡野奏子さん、二階堂まり実行委員長

その2

二階堂：伊藤さん、ありがとうございます。この国はシステムがきちんとできている。憲法を守るということについても難しくない。違憲訴訟でも簡単な手続きで裁判を起こせる。例えばビールのラベルをはがしてその裏に住所と名前、困っていることを書いて持って行けばよいと聞いている。難民の問題は色々難しいことがあるが受け入れるのは、「困っているなら助ける」「コスタリカにすれば彼らが幸せになるなら拒否するわけにはいかないでしょう」と訪問した家の方が話していた。幼稚園で軍用機がきれいに塗られて滑り台として使われている。すごいなあとびっくりした。

それではディスカッションに移りたいと思います。岡野さんを紹介します。いま大学2年生ですが、高校生の時にコスタリカに留学していますが、どうしてコスタリカを選んだのか、滞在して何が一番印象に残っているのか、お話ししていただけますか。

岡野：岡野奏子です。高校1年生の時にコスタリカに留学しましたが、きっかけはコスタリカに行った先輩の話を聞いたことです。すばらしい自然とそこに生きる人々の写真を見て、憧れて留学することを決めました。一番印象に残っていることは人をととても大切にすることです。道端で知らない人にあっても、「PURA VIDA」（プーラ・ヴィーダ 人生サイコー！）と声を掛け合ってあいさつします。そういうところがコスタリカの魅力で、素晴らしいところだと思いました。



二階堂：私もコスタリカに行った時に学校の先生に教育の目標を聞いたのですが、第1に他人のことを考える、人権、話し合いで解決する、自分で考え行動する子どもを育てること。話し合いで解決すると言うことですが、小学校では家でトラブルがあるとそれを学校に持って来て解決の仕方をみんなで話合う、友だちと喧嘩しても同じ。個人同士のもめごとが大きくなっていったのが戦争だよと教える。小さい時から話し合いで解決することを教えるといっていました。

伊藤さん、コスタリカの教育はあまり教科書を使わないということですが。

伊藤：日本の文科省にあたる教育省というところに行って、女性の局長さんに「教育の目的は何ですか」と聞きました。そうしたら図にあるように4点をあげました。

○生徒自身が幸せで満たされること ○同級生と共存、信頼関係を築くこと ○自然との間で持続可能な発展ができること ○誰かの言葉を鵜呑みにするのではなく批判的に考えて自分自身の考え方を抱くようになること。すごいじゃないですか。

日本との違いがあるのではと思い聞いて見た。日本では教科書問題が色々あり、文科省でこれを使えと。そうしたらコスタリカでも教科書はあります。ありますが使う

などと言っています。それはどういうことですかと聞いたら、地域によって生徒の状況は違います。先生は地域に応じて、生徒に応じて自分で教材をつくるべきです。その教材を子どもたちに教える、先生は教科書などというものに安易によりかかってはいけません。これが答えなんですね。(岡野さんに)教科書使っていた？

岡野：数学だけ。他は先生の作ったノートを使いました。

伊藤：というように一括した教科書を使うのではなく、先生が工夫して、考えて進めているというのもすごいことです。

二階堂：ホワイエの平和図書コーナーにはコスタリカの展示もあり、岡野さんが使った教科書もどきのプリントしたものがありますが、それ？

岡野：そうです。先生のプリントを教科書にして教わりました。

二階堂：中学生や高校生に家で政治の話をするのかと尋ねたら、(当たり前のことなので)えっという顔をされた。選挙はお祭りみたいな感じなんですか？

岡野：選挙というと日本では真面目で堅苦しいイメージですが、コスタリカはお祭りという雰囲気です。選挙になると子どもたちも自分の応援する政党の旗を持って、町を走りまわっていて、お祭り騒ぎです。

模擬選挙ですが、田舎なので私の学校では模擬選挙はなかったのですが、首都の学校ではあったと思います。

伊藤：画面に映っているのが模擬投票の姿。コスタリカは4年に1回大統領選挙がある。選挙のたびに子どもの模擬投票というのがあります。写真の左側は高校生、右側がまだ幼稚園ぐらいのこどもです。高校生が選挙管理委員会となって子どもたちに投票用紙を渡します。子どもがもし投票するとしたら誰に投票するか自分で判断する。投票用紙は本物の投票用紙です。それに子ども選挙用とスタンプが押してある。投票のまねをするんじゃない。本当に投票権があれば誰に入れるか考えて投票します。家庭でも討論します。学校でも討論します。だから、コスタリカでは政治の話をするのは当たり前なんです。日本で政治の話をするのと友だちがいなくなると言うのと、ビックリされる。何でなんですか！と。自分の社会のことを決めるんでしょ。子どもだってこの社会の一員なんだから、政治の話をするのは当たり前じゃないかと。こうして子どもの時から模擬投票をする。だから子どもの時から政治意識が高くなる。

教育の目的

- 生徒自身が幸せで満たされること
- 同級生と道徳的な価値観を共有し
共存、信頼関係を築くこと
- 自然との間で持続可能な発展ができること
- だれかの言葉をうのみにするのではなく批判的に
考えて自分自身の考え方を抱くようになること
- 3つの柱＝民主主義、人権、平和



大統領選で

子どもの
模擬投票



2002年の大統領選挙の時に撮った写真です。これは投票所なんです。ここにテントが張られていてそれぞれの政党ごとにテントが張られていました。この黄色いユニホームの政党、少し保守系、向こうの緑色は革新系、でもいるのは子供じゃないですか。何で子どもがいるのか不思議に思った。君たち何しにきたの、親に連れられて来たのと聞いたら、自分の意思で来ているんです。自分はこの政党の大統領候補を支持しているからお手伝いしたいと言ってここに来ている。ここら辺をぶらぶら歩いていたら緑色のユニホームを着た女の子が近づいてきて、僕を有権者と間違えて「投票する人を決めましたか」「もし決めてないならこの人に投票して欲しい。」なぜ大統領に推薦しているのかその理由をとうとうと述べるのです。というぐらい、自分で確信を持っている。それ位、政治意識が高い。18歳選挙権は1974年からやっています。本当に子どもの政治意識が高い。その点は日本と違うところです。

二階堂：(画面に)選挙最高裁とあるのは大統領選挙なんですか？

伊藤：はいそうです。日本では聞きなれないのですが、大統領選挙の半年前になると全ての権力はこの最高裁判所になる。国民に民主主義が大切なんだとキャンペーンして回る。この時だけでなくズーッとやっている。例えば子どもたちに民主主義はなんだ、いかに大切なものなのかを教える。どういう時かというと小学校の児童会の選挙、中学校の生徒会の選挙の時、この最高裁判所が乗り出してきます。ゲーム感覚で民主主義を教える。この右側の写真の方、その時の教材に使っているものですが、ここに民主主義に必要な5つの要素と書いてある。

①参加 ②寛容性 ③多様性 ④対話 ⑤連帯 この5つの要素、これが民主主義にとって大切なんだということを見童会、生徒会の選挙の時に子どもたちに伝える。これをさらに詳しくした資料が左側の写真。5冊のかなり分厚いパンフレットがあって、子どもたちに授業で教えている。こういうことを小学校の時からやっているから、子どもたちに民主主義とは何だということが頭にすんなりと入ってくるんですね。日本ではこれほど深く教えない。

二階堂：この選挙最高裁判所がパンフレットをつくって、学校に出前に行く？

伊藤：出前に行くのです。全ての学校に行きます。

二階堂：裁判ということは裁判もするのですか。選挙違反の裁判ですか？

伊藤：はい、そういうことです。選挙が不正に行なわれないように見張るということ。もちろん不正が行われたら、指摘します。

二階堂：岡野さん、そうした授業はありましたか？

岡野：高校はありません。

伊藤：小・中学校です。

二階堂：もう少し学校の授業の話聞かせて下さい。

大統領選挙の子どもボランティア



選挙最高裁の民主主義教材



岡野：朝7時に始まって夕方4時まで続きます。日本の高校と比べても朝が早くて疲れるのですが、スピードはコスタリカペースでゆっくりと進んでいきます。基本は先生と生徒の対話、ディスカッション形式で進んでいきます。話が脱線することも良くありました。学校生活はゆったりしていて昼休みと2回のおやつタイムがあります。みんな生き生きとのんびりとした毎日を過ごしていました。

お昼はカフェテリアで、みんなで食べます。費用は家の年収によって決められていて貧しい家庭の子どもは無料で、裕福な家庭は全額支払うように決められていました。おやつは自腹で好きなものを好きなだけ買うということでした。

授業は楽しい雰囲気、シーンとした雰囲気ではなくみんなが意見を言い合うようにぎやかなクラスでした。

二階堂：私が教えている学校でもコスタリカから留学生が来たことがあるのですが、彼女の家にもホームステイしているのですが、とにかく楽しいことが一番！といつも言っていましたね。

伊藤さん、机の話を。

伊藤：小・中・高と授業を見に行っただですが、やかましいほど楽しくやっている。日本の授業ってシーンとしているじゃないですか。誰かが発言すると黙りなさいと言うじゃないですか。コスタリカの授業は楽しんで、ゲームをやっているようなそんな感じがあるんですね。その一つには多くの学校の机は台形をしている。6つ集まると六角形になる。そうすると、子どもたちは話合いながら授業をする。日本はみんな先生の方を向いて、暗記するように授業をするが、コスタリカは先生が一つ質問を出すと子どもたちがディスカッションをしながら答えを出す。こういうことをしているので、ほんとにやかましいのです。やかましいぐらい楽しいということ。

二階堂：そう言えば私が小学校を見に行った時に廊下の両側に教室があって、始終こっちの教室からあっちの教室に行っていた。生徒が動いている。一斉に何かをするのではなく一人ひとりが今やらなくてはならないことをしているという感じ。

岡野さん、ニカラグワの難民はクラスにいましたか？

岡野：難民の人はいませんが、祖先がニカラグワの人は何人かいました。12月にはコーヒー豆の収穫にニカラグワから沢山の労働者が来ます。そうした時に会いま



休み時間に友だちと撮った写真。



クラスで担任の先生の誕生日をお祝い。



おばあちゃんを囲んだ孫たち
コスタリカは大家族

した。ニカラグワの人は貧しかったように思います。家に来て、洋服とかで要らないものはないかと聞かれたことがありました。帰国前で太ったので、着られなくなった洋服があったので、それをあげたらすごく喜んでくれました。

二階堂：コスタリカは食べものが凄く美味しい。味が優しい。何キロ太った？

岡野：10kg！

二階堂：コスタリカはエコツーリズム、自然をすごく大切にしていると聞いています。小学校の1年生を訪ねたときに絵を描いていた。絶滅危惧種の勉強ということで、その絵を描いていたのでビックリ。1年生ですよ。

岡野：1年に2回遠足の機会がありました。普通の遠足とは違って、自然を学びに行くことが目的の遠足でした。この写真がみんなで自然を見に行っているところで、生徒だけでなく、保護者や兄弟も参加する大きなイベント。みんなで自然の大切さを学びに行く機会がありました。

おじいちゃん、おばあちゃんまで参加していました。

二階堂：エコに関してはお金が厳しい？

岡野：国立公園に行くのに入場料が必要なのですが、在留カードを持っていれば現地の人の料金で入れる、外国人だとその4倍以上掛ります。私は在留カードを持っているのですが、その日はうっかりして忘れてしまいました。ずっと滞在しているし、良いじゃないかと交渉したら、普通は優しいので許してくれるのですが、その日だけは許してくれなくて、しょうが無く外国人の料金を払って入場しました。観光などには規則が決まっていて、厳しく管理されているんだと思いました。

伊藤：この国は平和立国、教育立国とともにもう一つ、環境立国ですね。世界でエコツアーを始めたのがコスタリカ。世界の環境の最先端を行っています。ご覧のようないろんな動物がいて、左上の鳥はケツアールといって、手塚治虫が火の鳥のモデルにしたという鳥。本当に色々な植物、動物がいる。それを大切にしている。例えば、このコスタリカにはトンネルが1個しか無い。なぜトンネルが一つしか無いかというと、環境を壊さないことを哲学としているため。でも一つだけどうしても造らなければならなかった。国立公園を分けるように道をつくらなければいけないことになった。それで道路をつ

くると動植物が分断されてしまうじゃないですか。それはいけないということで人間が地下を通れば良いということで造った。人間は下を通る、動植物は地上を行き来できる。このように、環境にとっても力を入れている。それがこの国の力になっている。



自然を学んでいる遠足写真
家族ぐるみで参加する。



エコツアー



エコツアーを見に行ったことがある。山奥にエコホテルというのがある。森を案内してくれるというので行った。夜中でザンザ降りの雨でした。両手に荷物持って走って行ったが、フロントにいた白髪のおじいちゃんが出てきて、僕の荷物を持ってくれた。部屋割をやったら山小屋ですから 100m ぐらい離れている。どうしようかなと思っていると、白髪のおばあちゃんが出てきて傘をさしてくれる。そうして山小屋に泊まって、朝、雨も上がりすがすがしいので散歩した。フロントの前で若いお兄ちゃんと立ち話をしていて分かったことは、雨の中をぼくの荷物を持ってくれたのは元大統領だということです。この人(カラソ元大統領)です。傘をさしかけたおばあちゃんは元大統領夫人だということです。

この人、国連平和外交をつくった人です。ひょいっと見たら朝からフロントに立っている。率直に聞きました。元大統領ですね。そうです。元大統領がどうしてこんなことをしているのですか？大統領は1期4年しかやってはいけない。権力者をつくらないため。ちなみに国会議員も1回やったら次の選挙に立てない。こういう法整備ができています。ということで、大統領は辞めた。国会議員になれたが、若い人が育たなくなる、そこで、政治家をすっぱりやめて、一市民としてこの社会の発展のために尽くしたいと思った。つらつら見渡してみると、平和の道筋もできた、教育の道筋もできた、足りないのは環境だと全財産をなげうって一山買ってエコホテルを建てて、自然と人間の間を関係を考えてもらおうということです。偉いじゃないですか。うちの国とは大分違います。



二階堂：エコということで感動したのは、私は8日間ぐらいいたのですが、自動販売機やコンビニを全く見ない。学校にもないですね。

岡野：ないです。エレベータとかも無い。首都のショッピングモールに行かないとない。

二階堂：気付かずに過ごしたのですが、帰るときにそう言えば自販機が無い！色々なことが徹底しているなど。

大統領で思い出したんですが、伊藤さん、元大統領のアリアスさんが小学校で習ったことをやっているだけだと言ったとか？

伊藤：周りの三つの国の戦争を終わらせてノーベル平和賞をもらったアリアス大統領、平和憲法を持っている国は他国の平和にも貢献するということだったのですが、さらに聞いた。どうやって戦争を終わらせたんですかと聞いたら、暴力に暴力ではなく、話し合いすることで全てのもめごとは解決できる、そういうことを説得した。何で話し合いで戦争を終わらせるということを思いついたのですかと聞いたら、コスタリカでは小学校の授業でそう教えている、自分もそう習った、あらゆるもめごとは話し合いで解決できる、小学校で習ったことを大統領になって実践しているだけだと、そう言うんです。すごいですよね。

二階堂：別の世界のように。日本はコスタリカより1年早く平和憲法を持っているんですね。

話そうと思ったことはこれでよろしいですか。

では、来場者から質問はございますか？

質問 1：ひとクラスの人数はどの位でやっているのですか？

岡野：私のクラスは28名。1学年1クラスしか無いので、日本の学校に比べると規模は小さい。私の学校はあまり生徒が移動することではなく、先生がクラスに来て教えるというのが基本でした。

伊藤：日本の文科省にあたるところで聞いたのですが、一クラス23名ということでした。

質問 2：移民が100万人ということですが、言葉の壁はどのようにされたのか？人間関係を作れるようになるプロセスを。

伊藤：言葉の壁がありません。スペイン語なんです。ただ、ニカラグアから来る子どもたちは学校に通っていない子が多い。コスタリカの学校に入っても椅子に座れずに走り回ってしまう。これをどうするかがコスタリカの先生の問題だった。今から10年以上前にコスタリカの先生と国連平和大学の先生が一緒になって、難民教育のプログラムをつくりました。ビックリしたのですが72通りのプログラム。それに、小学校1年で入って6年間、1ヶ月に1つ目標を達成していく、だからプログラムは12ヶ月×6年間＝72通り。一番最初に何をやるのか、地球の歴史なんです。46億年前にできて、その後三葉虫が…、哺乳類が…、恐竜が…。そしてようやく人類が誕生するということを教えると、いままで走りまわっていた子どもがピタリと止まる。自分はもしかすると重要な存在じゃないか、走り回っていていいのかと思う、これが第1段階なんです。一つづつステップを踏んで行って72通りを終えて時、小学校を卒業する時には難民の子は自分の頭で考えて行動するようになる、そういうプログラムを開発するというのもやっています。

質問 3：日本のことを考えると、政治意識であったり、国民意識であったり違いますが、平和の問題で解決しなければならない問題がたくさんあると思いますが、日本がコスタリカのような平和な国を目指すためにまず何をしなければならないのでしょうか。

岡野：制度とかは分かりませんが、コスタリカが平和だというのはみんなが幸せだなと感じられるからだと思うのです。幸せだと感じられるのは心に余裕があるから、それは人を思いやったり、自然を大切にすることにつながっていくと思っていて、心に余裕、時間のゆとりを持てる社会が平和につながっていくのかなと思います。

伊藤：子どもたちの画像を。子どもたちがボランティアで選挙活動をしている、ここに一ついえると思います。日本人って心の中で思っても行動しないじゃないですか。コスタリカでは思うだけじゃなくて行動するんですよ、子どもでも。子どもだってこの社会の一員だとはっきり自覚している。おかしいと思えばおかしいと言うし、このように支持する政党のボランティアをする。日本には行動するということが無い、これが一つです。それから、いま制度という話がありましたが、例えば日本は男女平等を謳っていますが、しかし、この社会は平等になっていないじゃないですか。コスタリカは国会議員57議席中、女性議員は26議席です。何でこうなっているのか、調べてみました。男女平等の憲法ができた直ぐ後に、法律が創られたのですが、国会議員は比例代表制です。政党は選挙のたびに候補者名簿を出します。候補者名簿の40%以上は女性でなければならない、という法律をつくっている。さらに公務員も40%以上は女性でなければならない、こういう法律をつくりました。民間企業も40%以上が女性。理想の社会をつくるために法律で理想の社会に近づく制度をつくっている。日本はやっていない。このように、理想の社会をつく

るために制度を整備している、これが2番目。もう一つ、岡野さんがいっていましたが、どうしたら幸せになれるのかということですね。コンビニがあって自動販売機があるのが幸せなのか、それとも誰もが一緒に暮らしていける社会、誰も排除しない社会が幸せなのかということですね。何が幸せなのかということを考えることです。毎年、調査結果が出ていますが、コスタリカは途上国で1位です。全世界でも13位。日本は54位です。こういう豊かさとは何かを考えることが必要だと思います。

二階堂：豊かさとは何か、幸せとは何か、もう一度皆さん、考えてみましょう。最後に私の大好きな言葉、軍隊を排除した時の大統領ホセ・フィゲーレスの夫人カレンさんの言葉です。

「平和は努力して作っていくものです。言葉ではなく行動です。行動するためには最初にまず、夢を見なくてはなりません。」

ありがとうございました。

人間が幸せに生きられる国

- 「世界で一番、幸せな国」(英国シンクタンク) 2014年から～
 - 国連の「世界幸福度報告書」 2018年3月発表
- コスタリカは13位(途上国では1位)
日本は54位

挨拶言葉は

プーラ・ビーダ(PURA VIDA) = 純粋な人生